

## 春のアミガサタケ (1)

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

3年生の子どもたちと、校庭の春を探索している時、「先生、先生、先生、キノコ、キノコ、キノコ!!!」と腕を引っ張られた。私が到着すると、すでに約10人の人だかりができていた。学校の敷地ぎりぎりのコンクリート塀の隙間に、一塊のキノコらしきものが見えている。これは「アミガサタケ」にちがいない。



キノコは菌類の子実体のうち、目に見える大きさのものをさす。子実体というのは、胞子を作って飛散させる器官で、主に秋に地面や切り株などに発生する種類が多い。しかし、アミガサタケは春のキノコである。



「アミガサタケ」 *Morchella esculenta*

私はいくつかの点で、子どもたちの行動に感心した。一つは、この奇っ怪な物体を「キノコ」とであると認識したこと。もう一つは、すぐには採取せずに、私の到着まで「現状維持」をして待っていたことである。



アミガサタケは、普通のキノコとはちがひ、蠟細工のように脆く壊れやすい。特に「茎」は中央部が細く、無理に引っこ抜くと、簡単に折れてしまう。採取する場合は、根元から「土と一緒に」採る注意が必要だ。写真でもわかる通り、根元はくっついている場合もあり、この発生形態を「束生(そくせい)」という。



アミガサタケを縦に割ってみると、中は完全に空洞になっている。これを「中空」という。椎茸などは「中実」という。短期間に胞子を飛ばすだけの器官なので、「構造物」を節約しているのだろう。(つづく)